

Local Architects という新たな設計手法の展望と可能性

—LAs のデザイン手法を用いた京都府八幡市男山地域の提案—

文部科学省 私立大学 戦略的研究基盤形成支援事業
 『集合住宅“団地”の再編（再生・更新）手法に関する技術開発研究』

SEPTEMBER 2015
 VOL. 183

0. 背景と目的

現在の社会は、大量生産大量消費の資本主義の中にあり、様々な利益を生み出してきた一方で、未来への様々な問題を残してきている。

持続可能な社会を目指すこれからの日本は、都市への一極集中から中規模の地方都市や郊外のベッドタウンなどが複数の基盤を作り、互いに関係を持ちながらも個々が自立し地域ごとに特徴を持つような社会ではないだろうか。それぞれの地域が文化や資源、気候風土を改めて問い直す必要がある。

建築分野においても 3.11 の震災以降は建築個体だけではなく、建築を利用する人々の関係をもデザインする、ソーシャルデザインの意識が浸透し始めた。実際に建造物としての建築設計以外にも、人々が交流する場所やきっかけを作ったり、住み良い環境をつくるために制度やルールの変更を行ったりと様々なスケールや対象を扱える建築家ならではの多様な職能が発揮され始めた。

しかし、建築家に求められる職能が多様化していく中で、建築家は様々な専門性を一手に担うのではなく、様々な専門家と協働することが重要になっていくだろう。

[Local Architects] は地域建築家を指す [Local Architect] に、複数形の [s] を付けた造語である。（以後 LAs と記す）

LAs は、地域でのモノやコトの設計において、専門家の他にもユーザーやクライアント、施工業者など、設計に関わる様々な人々が設計プロセス自体に参加し協働する状況をつくり、そのチームや設計手法、プロセスのことである。（図1）

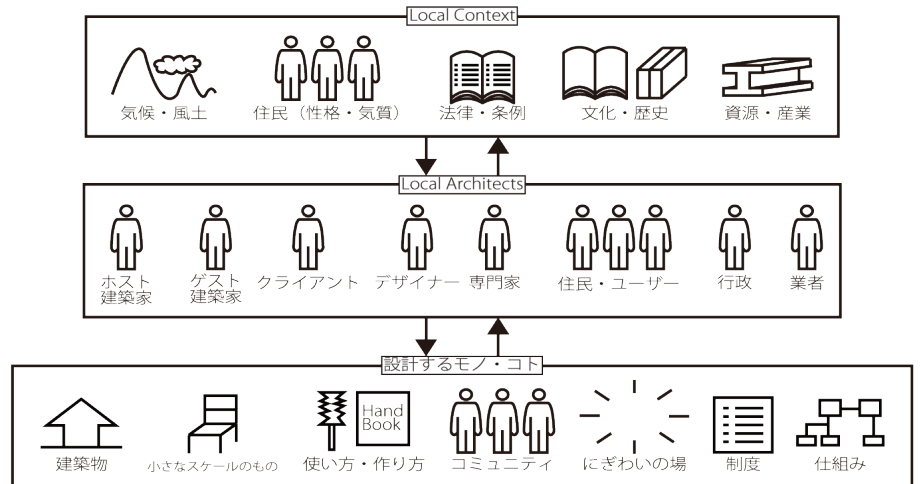


図1. Local Architects

本論文の目的は、その LAs 像を過去の建築家の調査や実際の地域での設計提案から提示することにある。

ユーザーやクライアントは、コミュニティの創出、場の利用方法や運営の仕組みなど、設計において関与すべき事項が増えたことから設計プロセスの様々な工程に関わる必要が出てきた。

施工業者や職人も、これまでの縦割り発注とは違うフラットな立場で参加することで、地域の資源や産業を活かした工法・技術を用いた設計が可能となるはずである。

1. 参加と共創の設計プロセス

LAs にはその地域の気候や文化について熟知している建築家や、設計内容に造詣のある建築家、クライアント（企業や行政）、そしてそれを利用するユーザー（住人）など、様々な専門家や設計に関わる人々が参加する。

この章で重要な前提として、ユーザー（住民）はその地域に住み 周辺環境や気候、文化を意識的にも無意識的にも感じ、適応し、体現していることから、「固有の経験を持った

専門家」であるということがいえる。そして、特に住居や生活における設計に関しては、ユーザーでありクライアントでもある状況があるということだ。

また、ユーザーの参加を可能にするためには、建築の専門知識や技術とは違った専門性が必要になってくるのは明らかである。参加したユーザーから気付きや考察に対する反応や表現をうまく掬いとり、解決案に活かすには様々な知識や技術が必要である。

そこで、心理学や社会学、地理学で用いられる調査手法や、プロダクトやウェブなどのデザインで用いられるプロセスの引用からこの章を構成する。

建築とは違った専門技術から本章をまとめることで、これからの建築家や LAs の役割がより多様な分野にわたることが言及できるのではないだろうか。

1-1. 地域の問題、課題、ニーズの発掘

これまでの建築や空間の設計プロセスにおいて建築家が担ってきたのは、クライアントの設計依頼が前提

の解決案としての設計のみであった。

LAs による設計はその地域に必要なもの・ことを LAs の観察や調査、そして建築家自身が居住している中から、その地域固有の問題や課題、潜在的なニーズを発見・発掘することから始まるのではないだろうか。(図2)

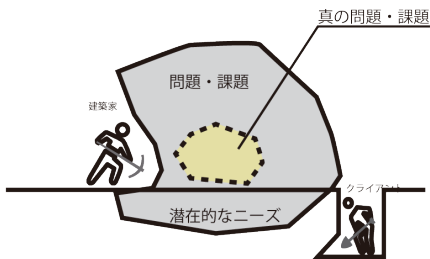


図2. 問題・課題・ニーズの発掘

1-1-1. 観察・調査 (エスノグラフィ)

本項では地域に住むユーザー(住民)に対しての「観察・調査」の手法をまとめる。

観察・調査の手法として「エスノグラフィ」という方法がある。エスノグラフィは日本語では民族誌と訳されるとおり、「文化」や「社会」と言った大枠の言葉では理解しきれない、そこに住む人々の実際の生活や仕事、活動の現場を内側から理解するための調査・研究である。

エスノグラフィの手法を基に地域でのフィールドワーク調査を LAs による設計プロセスとして解釈し、まとめたものである。

エスノグラフィによるフィールド調査は大きな段階に分けると、

- ①フィールドサイトの選定
 - ②フィールドの全体像を把握
 - ③リサーチ・クエッションを立てる
 - ④観察のユニットを定めて焦点観察を行う
 - ⑤観察結果を読み解くための理論枠組みの探索をおこなう
 - ⑥理論に導かれた事象の選択的観察を実施
- の8段階に分かれる。それぞれの詳細内容については、本論で示す。

1-1-2. 居住

本項では LAs のその地域に住む

人々自身の立場から、その環境への知覚や態度に関する論考をまとめる。

地理学者であり、社会学者でもあるクロボトキンは「ある固有の土地で成功するための必須の条件は、コミュニケーション、つまり隣人達と友好的な関係を維持できることなのです。」と述べる通り固有の地域に深く関わることの重要性をを解いている。

LAs の建築家もその地域に居住することで、ユーザーとの関係を発展させて、地域特有の知恵や知識を発掘することができるのではないだろうか。

一方で、居住しない人間の方が、地域に対して敏感にその土地の情報を把握することが出来るともいえる。イフー・トゥアン著の「トポフィリア」の「6章文化・経験・環境への態度」来訪者と住民では、「来訪者の視点は単純であり、簡単に述べられる。また、

目新しさに直面して、自分自身を表現しようとする誘惑にかられることもあるかもしれない。他方、住民にとっては、自分の複雑な態度を表現するのは困難であり、それは、行動や地域の伝統や伝承や神話を通して、間接的に表現されるのだ。」

以上のように、居住している住民にとって、自分たちの生活環境を相対的に見ることは困難で、このことから LAs には地域に居住する建築家も入れば、地域外から仕事としてその場所に訪れるような建築家も必要であるといえる。

1-2. 地域への解決提案

LAs として関わる方法について、本節ではその関わり方をクライアントとの共創、ユーザーとの共創に分けて説明していく。また、住居や生活環境の設計においてはユーザーがクライアントにもなりうる状況がある。

1-2-1. クライアントとの共創

1節によりユーザーの観察・調査から、真の問題や課題の発見や潜在的なニーズの発見をしたクライアントは、建築家とともにそれらの解決案を設計する。

クライアントと建築家の共創は、クライアントの介入の具合によって5つのパターンに分けることができる。

- ①処方：課題に対して1つの解決策を提示する
- ②選択/メニュー：いくつかのデザイン案からクライアントが選ぶ
- ③共創：対等にコラボレーションする
- ④支援：クライアントがデザイナーによるデザイン指導と援助を受ける
- ⑤DIY：クライアントがデザインする様子をデザイナーが観察し必要に応じてコメントを加える。
- ⑥それらの組み合わせ

1-2-2. ユーザーとの共創

ユーザーは「地域に対して固有の経験を持った専門家」である。

近年のDIYの流行からユーザー自身が必要なものを自身で考えて作ることもよく見られる。技術があがってくると、ユーザーがデザイナーとして、他のユーザーに提案や指導をするなどの状況も生まれてきている。

このように、ユーザーがよりクリエイティブに自分たちの地域や生活環境を改善しようとする状況ができおり、そのようなユーザーが LAs として設計プロセスに参加できると、解決提案はより豊かなものになる。

1-3. 解決案の共有

地域住民同士のコミュニティによるローカルなつながりとインターネットによるグローバルなつながりは、これからの社会においてより複雑に発達していく。

気候風土や資源などに共通項がある地域同士でも、経済状況や文化な

どに差があり、知識や技術を持っていない地域と情報を共有する組織やwebサイトである。このように、ローカルとグローバルの双方が関係を持ってつながり、知識や技術が共有されていく。(図3)

1-3-1. 地域コミュニティを介した解決案の共有

LAs のデザインした解決案をその地域内で共有するには、設計プロセスの問題定期的段階から参加しているユーザーが重要な役割を果たす。

ユーザー自身の利用体験は、地縁的コミュニティを介して広がり共有されるほか、趣味的コミュニティのようなコミュニティ通じて地域内で共有される。

また、地域内でコミュニティが形成されていない場合は、新たなコミュニティの場を設ける必要がある。

そのような場を作ることも LAs の重要な役割であり、ファシリテーターのような技術を持った専門家が LAs 内にいるとスムーズである。

1-3-2. ネットワークを介した解決案の共有

専門家同士のつながり、各地域の LAs でやり取りする場合は、施工技術や、制度の改変のノウハウの共有、LAs の組織自体の仕組み作りに関するノウハウなどが共有するものとしてあげられる。同じ資源や産業がある地域なら、それらの活用技術やノウハウの共有もされうる。

積極的でクリエイティブなユーザーは、LAs の専門家を通じて、DIY のための設計図面や作り方のわかる説明書のようなデータの共有が行わ

れる。

上記で述べた共有項目を LAs 自体が管理するウェブ上に整理することもできる。その際は、LAs の中にウェブデザイナーの役割を担う人がいると解決案の設計とユーザーのフィードバックがすぐに行えるので、よりよい解決案を生み出すための重要な役割になる。

2. ラルフ・アースキンにみる地域に対するデザイン

北欧スウェーデンで活躍した建築家のラルフ・アースキンは、住民参加や気候風土を第一に鑑みながら建築を設計していた稀な建築家である。

スウェーデンの寒冷な気候へのアプローチを常に考え、箱モノではない環境に柔軟に対応するような設計を行っていた。ほとんどのプロジェクトがスウェーデン国内であることから、環境への対応を生涯をかけて追求したことがよくわかるだろう。(図4)

彼のプロジェクトは、個人の戸建住宅から集合住宅・住宅地開発や都市計画まで様々なスケールのものであるのだが、そのほとんどのプロジェクトにおいて、協働者を招いて設計を行っていることも、特筆すべき点である。

2-1. 住民参加のデザイン

アースキンは集合住宅や都市計画などのプロジェクトでは、その地域の住民に必ずヒアリングなどの調査を行っている。

アースキンの考えでは、建物の最終的な利用者となる人と共にプロジェクトへ参加することが、共同体における建築家の仕事の中で重要な部分であった。

それぞれのプロジェクトに置いて住民との関わり方は様々だが、住民と同じテーブルで協議することで、専門家同士の難しい言葉でのやり取りではない住民目線の言葉を用いる機会を作った。

また、住民参加には訓練という教育的な視点も重要である。恵まれない人や、参加することの出来ない状況にある社会的弱者に対して訓練が必要なのである。これは、抽象的思考や分析、問題解決、意思決定のプロセスにおいて必要なものであれば、なおさらそうなのである。

2-2. 施工者を巻き込んだデザイン

アースキンは設計段階から施工業者と協働することで、地域資源の効率の良い活用や、新たな工法の開発を行っている。

アースキンの活動した時代は近代化が進み、工業化された資材が大量生産され、それらが無機質で均質な空間を作りだしたが、アースキンはその時代の工業化を特徴的な表現を試みる機会だととらえ、単一さではなく、小さな部品のシステムによる永遠に続く多様性を意図していると考えていた。

2-3. アースキンにみる Local Architects という考え

住民との協働、施工業者との協働、建築家との協働など、アースキンは設計を自分一人で行わず、他者との対話や協議の中から建築を生み出していく。

ポリヤフィヤルのスキーホテルのプロジェクトでは、元々、自治体からスキーヤーや旅行者のためにダイニングホールをデザインするよう依頼されたものであったが、現地でのスキー場の実態の把握から、宿泊が出来るホテルの設計へと内容が変わっている。設計も、その地域で生産される材料を用いることで安価に作られている。また、アースキンが設計した後も、アースキンが加わることなく、ホテルに様々な改修を行っていることから、地域の建築となっていることも特筆すべきことである。アースキンのプロジェクトを整理していくと、ほとんどがこのように流動的であり、地域にとって生産的で

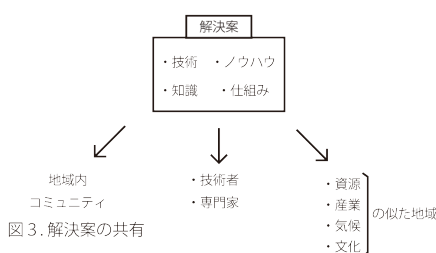


図3. 解決案の共有



図5. レクチャーの様子



図4. アースキンのプロジェクト



図6. 出町氏の資料



図7. 白須氏の資料



ある。
このような設計プロセスが、技術の発達が均質な箱ものの空間を生産していた近代建築の時代に行われていること自体が希有であり、本論文1章で述べたような設計プロセスと類似している点も見られる。

以上から、ラルフ・アースキンの設計手法からは、LAsのあるべき像として取り上げ、LAsの1つの設計手法として位置づけることが出来るのではないだろうか。

3. 現在活動する建築家にみる Local Architects 像

3章ではある特定の地域において様々な活動をしている建築家について、そのLAs的な活動を抽出しまとめる。

LAsの手法の1つでもある'技術やノウハウの共有'を目指し、建築家本人を招きレクチャー形式でその活動内容を話して頂いた。(図5)

出町慎氏は、関西大学の建築学科を2006年に卒業後、兵庫県丹波市で実際に居住し、地域住民や学生とともに地域活性化を行っている。自身が定住することで、丹波市佐治という特定の地域の活動を様々な役割で行っている。

白須寛規氏は、大阪の上本町で活

動する建築家である。コミュニティデザインなど、建築設計以外の業務も行っている。また、上本町の事務所である上町荘は、シェアオフィスとして場を共有しているほか、

一部を地域に開放しイベントなどを行える場としても活用されている。

2人の建築家の活動は、場所や活動内容などは、出町氏が1つの地域に住みながらホストとしてまちづくりを行っているのに対して、白須氏は様々な地域でゲスト(来訪者)として地域をデザインしていることに違いが見える。

居住することで地域住民と密な関係を作り、気候風土を肌で感じながら活動することの良さ、居住することで鈍感になるシンプルで全体を見渡せる視点を来訪者(ゲスト)が持っていることの良さのどちらも必要なことが、この2人の建築家の活動からいえる。

また、両者ともに地域に開かれた拠点を持っており、そこである意味実験的に地域との関わり方や仕組みを作っている点や、建築設計以外の仕組みづくりや、ワークショップなどを通じた地域を体験するきっかけづくりなどの業務を行っている点などの共通点がある。業務内容は違えども、プロジェクトの設計プロセス自体で、地域の住民との対話を行い密な関係を作り、地域の現状や課題を把握した上でそれらを包括的に解決するような提案を行っているところなど、これまでの章で述べてきたようなローカル・アーキテクツ的なプロセスを踏んでいる。

4. 修士設計— Local Architects としての男山地域の提案

1～3章で述べたように、ユーザーをLAsとして巻き込んだデザインプロセスについてや、ラルフ・アースキンからみる建築家同士の協働や、住民、気候に対するアプローチについて、現在活動する建築家のLAsとしてのふるまいの事例についてまとめたが、4章ではそれらの手法を元に1つの地域を設定し、その地域内でLAsの建築家として設計を行う。



図8. 男山団地の俯瞰



図9. KSDPの取り組み



図10. だんだんテラスの取り組み

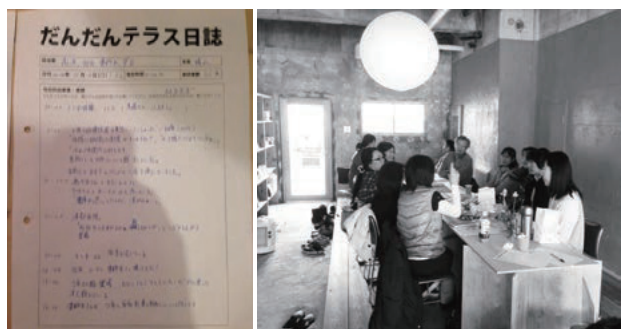


図11. だんだんテラスでの調査

敷地は京都府八幡市の男山地域である。ここでは、男山団地というURの大規模団地がこの地域のほとんどを占める郊外の団地である。ここでは、筆者も参加する関西大学のプロジェクトで団地再編のフィールドとして、行政やURを巻き込んだ活動を2012年から行っている。(図8)

4-1-1. 男山団地再編提案のまとめ

団地の再編に際し、「団地からまちへ」を共通の目標とし、学生と建築

家がチームを組んで設計を行った。ストックを活かしながら居住者も参加しつつ、住民が守り次いでいけるまちに再生・更新することを目標とした。

4-1-2. 男山地域再生基本計画のまとめ

関西大学は団地再編プロジェクトにおける男山団地再編に向けた活動の中で、八幡市役所、URとともに「男山地域まちづくり連携協定」を締結し、プロジェクトを進めている。

市役所の「男山地域再生基本計画」策定にあたって、KSDPが入って計画を行った。

2005年に八幡市が策定した「男山地域活性化基本構想」を元に、男山地域に置ける基本方針を示し、基本目標の実現に向けた地域活動での取り組みが、将来目標の「住みたい、住みつづけたい男山」の実現に向かって、広がっていく過程を大切にしている。(図9)

4-1-3. だんだんテラスについて

だんだんテラスは365日オープンコミュニティ拠点とし2013年11月から男山団地の中央センター商店街の空き店舗を利用して開設された。現在は関西大学大学院の学生がだんだんテラスの運営を行い、日々訪れる近隣住民に対して、聞き取り調査や、団地再編のノウハウ、DIYなどの情報発信などを行っている。(図10)

4-3. 解決案の提案

男山地域での活動の中で見えてきた課題や問題に対して、気候風土や周辺環境を把握し、住民との協働や、協議を行い、包括的に解決する提案を行う。(図12)

- 提案内容 -

・屋台

→男山地域の緑豊かな屋外空間にとどまる場所を創出させる。またその設計の共有化

協働者：学生 住民 地元の大工

・階段室の再編

→団地の階段室空間をにぎわいの場にする提案

協働者：学生 住民

・自治会の集会場の改修

→利用する住民による自主改修のプロセスと空間利用の提案。

協働者：学生 自治会員 竹倶楽部 (提案)

・スロープの改修

→スロープしたの空間利用によるにぎわいの創出

→中央センターにある汚れたスロープを住民参加で改修する提案。

協働者：住民 UR (提案)

4-4. 解決案の共有

以上で示した解決案は1-3で示したように、同じ生活環境の住民や、同じ資源や産業のある地域、同じ社

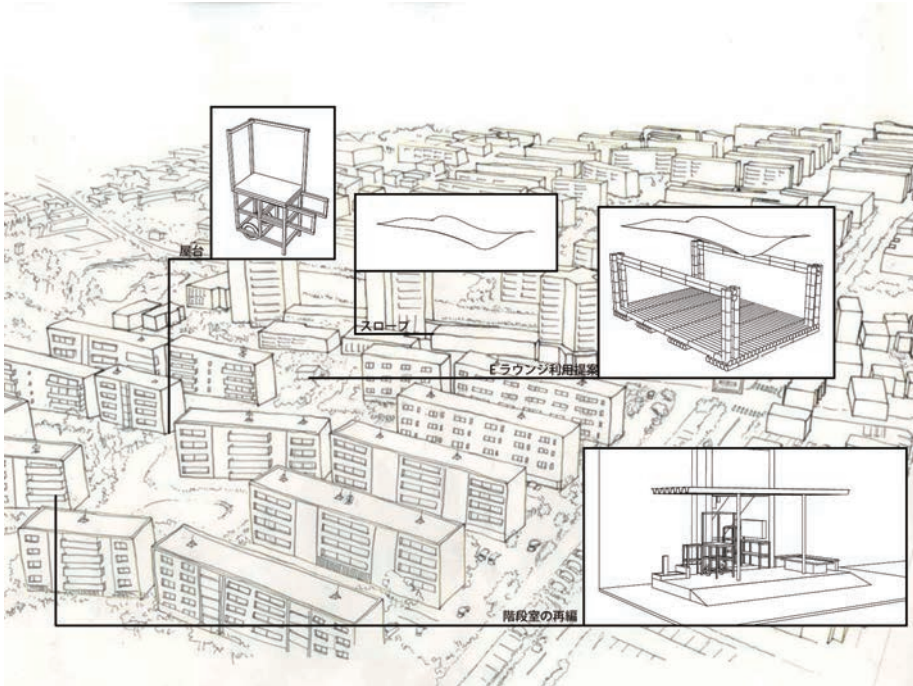


図 12. 提案内容

会課題を持った地域、同じような気候風土の地域などでその技術やノウハウを共有すべきである。

男山地域は、

○高度経済成長期に建てられた大規模な賃貸集合住宅団地

- ・ 同じ規格で作られた均質な住戸・住棟
- ・ 豊かな緑のある屋外空間
- ・ コミュニティの希薄化

○郊外のベッドタウン

- ・ 一時的に増えた小学校の廃校化
 - ・ 戸建住戸の空き家率の増加
- などの要素が抽出でき、それらと共通項のある地域での共有を行う。

web や紙媒体を用いた技術やノウハウの共有を行う。

- ・ 紙媒体
- ・ web
- ・ 使い方を見せる

5. まとめ・展望

- 調査・設計から見てきた Local Architects 像 -

調査や設計を通してユーザーやクライアント、様々な専門家との協働から、多様で豊かな設計プロセスがあることが浮かび上がった。

2、3章で取り上げた3組の建築家と4章で行った設計提案から、それぞれに共通している項目を挙げ、表として整理した。

また、それぞれの地域の特徴や、協働者の特徴、建築家自身の専門性の違いから多様なモノやコトの設計があり、それらの設計プロセスからは様々なパターンが見られた。

各章で取り挙げた3組や男山地域で行った調査や設計をみてもそれぞれに設計手法、設計プロセス、設計内容は様々である。(図 14)

以上の分析から、これからの地域を主体とする社会の中で、どのような

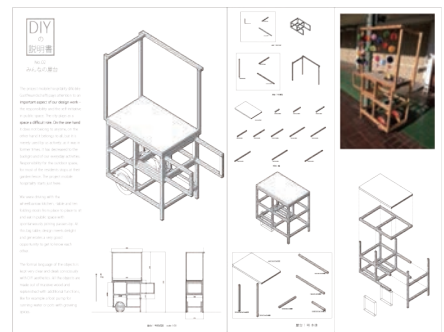


図 13. 技術やノウハウの共有

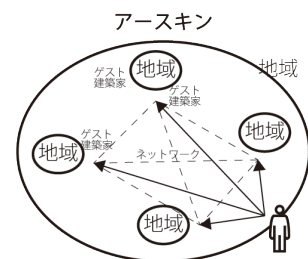
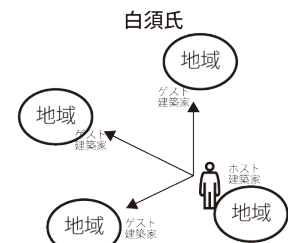
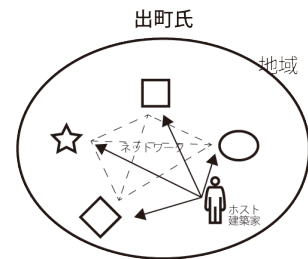


図 14.LAs 像の分析

LAs 像がその地域社会で有意義な活動を行えるかを、一部ではあるが提示できたのではないだろうか。

地域の数だけ求められる LAs の構成や手法はあること

も明らかになったが、これからの建築家に求められる新

たな専門性や職能があることも示す

ことが出来たのではないだろうか。

『Local Architects という新たな設計手法の展望と可能性 —LAs のデザイン手法を用いた京都府八幡市男山地域の提案—』

発行：2015年9月

作成：芦田 康太郎（関西大学大学院 博士課程前期）
宮崎 篤徳（関西大学 先端科学技術推進機構）

本リーフレットは、文部科学省私立大学戦略的研究基盤形成支援事業「集合住宅“団地”の再編（再生・更新）手法に関する技術開発研究（平成23年度～平成27年度）」によって作成された。

関西大学
先端科学技術推進機構 地域再生センター
〒564-8680 大阪府吹田市山手町3丁目3番35号
先端科学技術推進機 4F 団地再編プロジェクト室
Tel : 06-6368-1111 (内線:6720)
URL : <http://ksdp.jimdo.com/>